



# 「舌喰池の人柱」考

塩田平民話研究所 所長 稲垣 勇一

今年 10 月末、他の同好民話サークルと共同の民話に関わる語りと学習の会を開催する。今までの「民話フェスティバル」「民話のひろば」の延長線上の行事である。コロナ状況に合わせながら、細部についての変更の必要が出て来たとしても、余程のことがない限り行事の中止は考えていない。(本紙 2 面参照)

語りに特化することについては、以前この通信であらまし触れた。ここでは語られている物語の中身について概略考え、民話の力についても考えてみたい。

例えば西塩田地区に伝わる舌喰池の人柱伝説である。人柱伝説は民話分類では普通イケニエ譚の範疇にはいる。その中で、「舌喰池の人柱」はイケニエが実際に神に捧げられ悲劇として終わる話型である。そ

してもう一つこの話が他のイケニエ譚に際立って特徴的なのは、人柱になることをかたくなに拒否した人柱伝説であるということだ。人柱はイケニエである。生きたまま神に捧げられて初めてニエとしての役目を果たす。娘は自死を完結するために、舌を噛み切ることと入水という二重の方法をとって、それを完璧なものにする。そうすることで娘は、自分がイケニエになることをはっきりと拒否する。娘の死体を埋めたこの話は、本来の人柱伝説とは似て否なるものといえる。寡聞にして私はこの種の人柱伝説を他に聞いていない。娘がイケニエになることを、なぜこれ程までに拒否したのか。その根拠は、村外れに一人住んだこの里でのそれまでの暮らしにあると、この話を伝えた里人は、そ

つとだが分かる者には分かる形で伝える。くじ引きという一見公正な方法のイケニエ選出方法のからくりを娘はもちろん、里人たちも十分承知していた。けれどもそれは決して口にして頭にしてはならないタブーなのだ。

この話は「里の人たちは今も娘さんにお詫びをしながら池の水を使っている」と結ばれる。この終末もイケニエ譚としては稀有である。娘の在りし日の詳細を予想させる内容といい、この結びの言葉といい、ここに込めた里人の哀切な思いは深い。

語るということは、娘の思いに里人のそれも丁寧に重ねることだと考える。それは語りの技術を越えた、一見隠したいイケニエ譚の伝承をこうした形で伝えてくれた里人の心の深層に敬意を持つことと考える。そして、昔話でなく例えば特攻隊や更なる残酷な生贖譚の実在とそれへの対応の視点をこの話から学ぶのだ。



第 22 便  
2021.8.1  
塩田平民話研究所  
[事務局]  
長野県小県郡  
青木村大字当郷  
2072 番地 2  
☎0268-49-1231  
shiodadaira.minwaken@outlook.jp



雨に濡れた青竹がすくと伸びている。青木村の大法寺三重塔脇に、青竹を背景にした新たな碑が建った。青竹のようにまっすぐに生きた山本虎雄の顕彰碑だ▼山本虎雄は、1902 年、青木村田沢に農家の長男として生まれた。農業を担う傍ら、独学で学び、農民運動のリーダーとなる。治安維持法下の厳しい弾圧の中、農民組合を立ち上げ、上小各地の小作争議の支援に奔走する。また、戦前戦後を通して村会議員・収入役を務め、軍国主義教育に反対し、巡回産婆制度の実現、老人医療費の無料化など、村民の暮らし向上に奮闘した。私心なく人のために尽くした生涯



だった▼虎雄氏の長女は、「父は人のためになることをやっていたけれど、人にはあまりよく思われていないと感じていた」という。人は時として、我が身を守るために、真実を学び世の中を変革しようとする人を排除する。それは、昔も今も変わらない▼虎雄氏の足跡を学べば学ばほど、青竹のような生き方に共感する。虎雄氏をはじめ村の民主化のために活躍した「昭和の義民」たちの功績を「現代の民話」として語り継いでいくことが、碑の建設運動に携わった者の務めだと感じている。(弘子)

# 新企画 民話 語りっこ 学びっこ

## 10月30日(土) 開催

「民話フェスティバル」を15回、1年おいて「民話のひろば」を5回続けてきました。いずれも年1回の企画です。民話に関わりをもつサークルや個人が、語り・紙芝居・群読・演劇調など様々なスタイルで民話を発表する場を創造するとともに、講演会や交流学习会を企画し学び合う場にもなってきました。

その後一昨年・昨年と2年間お休みをいただきました。企画の方向性を練り直す期間として、また、昨年はコロナ禍の中で止むない休止でした。

今年、企画を変更しての新たな再出発。これまでの二日開催を一日にし、発表スタイルを語り一本に絞ります。他の様々

### 「昔ばなし語りの会」再開 子ども語り手も参加

2020年冬からの新型コロナウイルスの感染拡大、こんな事態になるとは誰も思っていなかったのではないだろうか。年に何回か開催してきた語りの会も、中止にしたり収録だけをしたりと、工夫しながらなんとか続けてきました。でも、「やはり民話の語りは目と目を合わせて聞いてもらって語るもの」という思いが強まりました。

なスタイルをむしろ否定するわけではありませぬ。ただ、語りのもつ聴き手との空気感、間合い、「対話」一体感を何よりも大切にしたいと考えたからです。そのことの重要性は、凶らずも昨年のコロナ禍の中での無観客動画撮影で嫌というほど味わいました。画面の向こうにしか聴き手を感じることのできない無味乾燥な無観客動画撮影は、語りの本質を見失ないかねないものでした。1回目の反省に基づいて、2回目は語りの順番を待つ塩田平民話研究所員が観客になりました。聴き手の存在の重要性を改めて知る機会になりました。

6月27日  
(日)、ようやくお客様を入れての語りの会を開催することができました。共催の上田創造館との相談で、観客は上限20名で事前予約制にしました。会場設置も椅子の間隔を空け、スタッフ用に会場の横にモニターを設置していただき



今年再出発する新企画は、「民話語りっこ学びっこ」。ユニークな命名ですが、民話を語り聴き合うことを通して、伝承文化としての民話本来の姿に近づき、民話のもつ力、高い文化性を学び合いたいという願いを込めました。

10月30日(土)、塩田公民館での開催です。午前・午後の二部立てで語り発表会、間に塩田平民話研究所稲垣勇一所长による講演、最後に学習交流会の予定です。語り発表会への参加者を募集します。事務局までお問合せください。また、当日は聴き手となる観客の皆さま大勢お見えいただけますようお願いいたします。

ました。当日は総勢23名で出演者の身内とスタッフが主でしたが、やはり聞いてくださる方が前に座っているとということ嬉しかった。今回はテーマを「困難を乗り越える」としました。こんな時期だからこそその語りを目指し、お話を選びました。現代の公害問題をとりあげた「九頭竜川の河童」、継母のいじめを具現に乗り切っていく「姥っ皮」など、今だからこそ聞いて欲しいお話が並びました。そして何より嬉しかったのは、2名の子どもさんが語り手として参加してくれたことです。丸子北小3年の山下陽平さんと神川小3年の土屋叶実さん。2人は稲垣所長が指導している「民話塾スマイルキッズたんぼぼ」の受講生です。声がよく通り、活舌が良く、時折身振りも交えての語りは素晴らしかったです。民話塾では、まず発声や腹筋運動などから練習をスタートします。そして、相手のお話を聴くこと、自分で考えることを大切にしているそうです。次はどんなお話を語ってくれるかなと、とても楽しみです。少し長く生きている私達は、子ども達に誇れるように、さらに精進してい

かねば！と決意した次第です。心に栄養をもらった語りの会でした。

(恵美子)



# 語りつづける

一つの明確なテーマのもとに語り  
の会を行うようになってから二年が  
経つ。テーマがはつきりしてくると、  
それぞれの語りの方向性も整い、す  
つきりと無駄な贅肉のない語りの会  
になるように思う。

一年半ぶりに再開された「昔ばな  
し語りの会」のテーマは、「困難を乗  
り越える」だった。まだまだ続くコ  
ロナ禍の中においては、実に納得の  
いくテーマではあるのだが、さて

テーマに合った昔  
話を採るとなると、  
語り手は随分と  
悩むことになる。もちろんこれは今  
回に限ったことではない。決められ  
たテーマをもとに選んだ昔話を語り  
手それぞれが吟味し、消化し、自分  
の言葉で語る。他の地域の昔話を語  
るときは、気軽にその地域へ行かれ  
ない分、特に事前の下調べと学習が  
必要になる。きちんと自分の中にイ



ひたすら観音様に願ひ、許婚が踏ん  
だ小石を百個拾えば、千曲川の氾濫  
で田畑を失い出稼ぎに行つたままだ  
つた愛しい人が江戸から帰ると諭さ  
れる。どうしても見つからない百個  
目も、観音様の指さしたさざれ石の  
間から湧き出た湯の中にあつた。  
千曲川の氾濫は、昔も今も人々の  
生活に大きな影響を及ぼしているん  
だなと思う。

その観音様を見たくて、夫と智識  
寺へ行つた。県道2号長野上田線か  
ら上山田温泉手前を左に、麻績イン  
ターに通じる県道55号線に入つて  
約1kmのところはこの寺がある。寺  
の大御堂の中の十一面観音像は、覆  
いが被され「住職所用で不在」とあ

り、拝観できず残念!!  
大御堂は、天  
平12年に聖武  
天皇の勅願所  
として冠着山  
東麓に建立さ  
れ、江戸初期に  
この地に移さ  
れた。静かな林  
の中に、妻入の  
茅葺の屋根が  
美しい。民話の娘も、この観音様に  
お願いをし、眼下に見える千曲川で  
小石を探したんだなと思ひながら、  
「恋しの湯」が旨く語れますように  
と願つてきた。寺の裏の坂には、「女  
涙坂」の話も伝わっている。(美和子)



この数年、夏季限定でミ  
ニマム農業に勤しんでい  
る。有り体にいえばキュ  
ウリやナスなどのままごと  
と菜園だ。そのままごと  
菜園に敷藁を分けていた  
だく縁で、ご近所の高齢の篤農家の  
方々と親しくさせていただいて  
▼田植え前に、田んぼの手入れをし  
ていたMさんをお見かけし、土手に  
並んで座り、少しお話を聞いた▼そ  
の田んぼから見える位置に、男池・  
女池という土手(堤)を共有する珍  
しいため池がある。その女池の四分  
の一くらいが、今まさに切り取られ  
埋め立てられようとしている▼初夏  
の今、未だに工事は本格化せず、土  
手の桜並木の古木を昨秋急いで切り  
倒さなくても、今春も十分楽しむこ  
とができたのにと、哀れ・残念に思  
う気持ちが出た。人も車も  
減っていくというのに、わざわざた  
め池を潰してまで、道路の新設が必  
要なことだろうか▼「俺たちは、ぼ  
つーと生きていないで、これまでの  
経験や言い伝えなどをしっかりと次  
の世代に伝えなければいけない」。M  
さんの口から出る言葉の重みは、民  
話の語りにも似て、ず  
しりと胸に落ちた▼早  
苗に変わったMさんの  
田んぼを、去年と変わ  
らない緑の風が吹き渡  
つていく。(きなこ)



産川

この数年、夏季限定でミ  
ニマム農業に勤しんでい  
る。有り体にいえばキュ  
ウリやナスなどのままごと  
と菜園だ。そのままごと  
菜園に敷藁を分けていた  
だく縁で、ご近所の高齢の篤農家の  
方々と親しくさせていただいて

## ふるさとの 民話探訪 18

# 恋しの湯

上山田温泉の出湯に  
まつわる民話で、「恋し  
の湯」とか「小石の湯」  
と言われる話がある。  
『万葉集』の「信濃相  
聞往来四首」のうちの  
第三首。

信濃なるちくくまの  
川のさざれ石も  
君し踏みては  
まと拾はむ

この歌が庶民の間  
も伝えられ、観音信仰  
と結びついて語られて  
いるところがいいなあ  
と思う。

気立ての良い娘が、

# 民話とわたし II

— 子らと歩む —  
塩田平民話研究所員 坂井 弘

民話を身近に意識するようになったのは、教育実習の時。稲垣所長が、当時の私の指導教官だった。子ども達と地域の民話を再話し民話集を編んでいる実践を横目に、教員になったら真似をしようと思ったものだ。

それから38年間の現役時代、子どもたちと何度も民話学習を営んだ。「民話フェスティバル」に子どもを連れて参加したこともある。そのうちの一人は、高校入試で民話の語りを披露し、見事合格した。あの子たちも、今は人の父となり母となつている年齢だ。我が子に民話を語って聞かせているだろうか。塩田平民話研究所の所員となつて、いっしょに語りをする仲間になつてくれる日がくればと期待もしたりする。

現役を退いて7年。民話研究所の活動に本格的に首を突っ込むようになった。語りを始めたのも、その時からだ。6人の孫が、それぞれのペースで昔ばなしをせがむ。同じ話をするを先を読んで自身で語りだしたり、嘘話を創り出して喜んでいたりもする。子どもには、昔ばなしの価値がストレートに入っていく。

## 「犀の角」の演劇づくりに一役 鞍淵を案内

7月4日、梅雨の雨間を縫って「鞍淵」へ出かけた。上田の「犀の角」で演劇を学ぶみなさんを案内しての探訪だった。

鞍淵は薄暗くひんやりとした冷気に包まれていた。たつぷりと水を含んだ樹々、苔むした大岩、雨で濁った水がごうごうと流れる産川。「わあ、すごい」「ああ、いいねえ」



「思っていたイメージと全然違う」  
初めて訪れた参加者たちは、口々につぶやきながら体全体で「鞍淵」を感じ取っている。  
鞍淵は、民話「小泉小太郎」の生誕の地。大蛇が赤児を産み落とした鞍岩が、産川を堰き止めるように据わつて

# 事務局だより

## 塩田平民話研究所総会

総会を4月28日(水)に行いました。2020年度事業報告・決算ならびに2021年度事業計画・予算役員体制を承認しました。

## 昔ばなし語りの会

本年度予定している「昔ばなし語りの会」は、左記のとおりです。  
上田創造館 8月29日(日)  
2022年1月30日(日)  
とつこ館 3月27日(日)

いる。戦前までは鉱泉宿があった。周辺には、当時の石垣の遺構がいくつも残っている。

この探訪は、6月に実施された稲垣所長宅での民話の語りから実現した。「犀の角」では、8月に民話と演劇「FOLK TALKS」という企画が催される。フィリピン・インドネシア・日本をオンラインで繋いで、民話を劇で表現するという試みだ。稲垣所長の「小泉小太郎」の語りが、「鞍淵」を体感することでのような劇に変貌するのか、大きな可能性に心ときめいて (弘子)

# 編集後記

東京オリンピックが始まった。世論の反対を押し切つての強行開催。誰もがコロナの蔓延を懸念する。世界中の変異株を身に纏つた最強無比の東京株が伝播することは容易に想像がつく。時の首相はどう責任を取るのか。口で言うは易いが、失政続きの政権がまともに責任を取れるはずがない▼コロナに目を奪われている隙に、6月に閉会した第204回通常国会では、悪法が次々に通つていった。老人医療費を2倍にする医療改悪、憲法改悪の地均しを進める国民投票法改定、基地周辺の住民を監視する土地利用規制法。火事場の泥棒よろしくの手法だ。秋には、悪政を終わらせるチャンスがやってくる▼コロナ禍の中で、リモートでの行事開催が日常化した。日本民話の会の例会も、すべてオンラインで行われている。自宅に居ながら中央の催しに参加できるのだから、都合のよいことこの上ない。コロナ後も、手法は引き継がれるだろう。だが、利便さの追求は、ときに大事なものを切り捨てる。民話の真髄は、対面こそ成り立つ▼学校教育の中でも、GIGAスクール構想が幅を利かせている。一人1台のタブレットの配布。子どもたちを電磁波の嵐に晒し、想像力を奪いながら、裏で大企業は莫大な利潤をあげている。 (弘)